

ケニア・ルオ女性たちの土器づくり素描

—村落調査のフィールドノートから—

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 椎野若菜

はじめに

サハラ以南のアフリカの村落社会はいまやどこにおいても、その程度に差はあろうと現金経済に巻き込まれている。西洋近代的な学校教育、物質文化が導入されている今現在、生業活動のなかから、あるいはその合間に、少しでも現金を得る活動をしなければ、家族を養うことも難しい。主たる生業活動から現金を得る場合、こまごまとした副業から得る場合とその方法も多様であるが、たいてい女性が後者の活動においてあらゆる手立てで生計を支えようとする場合が多い。

本稿では、ルオの女性たちによる多様な生計戦略のなかの、とりわけ土器作りに注目したい。まずはケニア・ルオ村落社会の社会組織、生業、居住環境等を概観したのち、そのなかで土器に関する象徴的な信念や用途としての位置づけ、土器づくりそのものはどのように行われているのかをみていく。そこにはケニア・ルオ社会における女性の地位、生き方、家族・親族の関係性、女性たちのネットワークの一旦をみることができる。本稿は、その一報告である。

調査地概要

ケニア・ルオ (Luo) と呼ばれる人びとは、西ナイロート系に属し、ケニア共和国の西部のヴィクトリア湖周辺に居住する。人口約404万人 [2009] で、ケニアのなかでも大きな民族集団である。ヴィクトリア湖近く、また湖にそそぐ川沿いに暮らしてきた人びとは漁をするかたわら牛を飼い、農耕を営んできた。湖畔か内陸かという環境により上述の生業の比重が異なる。

調査地は赤道をはさみ南北にひろがるルオランドのなかでも、サウスニャンザとよばれる南部で、バントゥー系のグシイ人の居住地に隣接している (図1)。ヴィクトリア湖からは25キロメートルほど内陸に入ったところでトウモロコシ、シコクピエ栽培を基本とする農耕中心である。グシイ高原ではコーヒーや紅茶といった代表的な換金作物が育つのに比べ、ルオランドは気温が高すぎることから、あえていえばサトウキビが重要な換金作物となっている。ただサトウキビは収穫するまで1年半ほど、長い時間を要するため、日常の生活費にはほかの小さな商売に従事しようとする女性が多い。

調査村は重要な主食であるトウモロコシやシコクピエを年に二回の播種する二期作、もしくは二毛作の農耕作業 (耕作、土づくり、草取り、播種、草取り、収穫) という農事暦が日常の生産活動の基本になっている。家族が年間に消費する主食は、自らの土地から得る自給自足が原則であるからだ。その合間をぬって女性たちは副食であるケールや料理にかかせないトマト、半栽培の野菜、といった家庭菜園をしたり、余剰作物の販売をしたり、酒づくり、ヴィクトリア湖からの魚の仲買、販売とい

ったあらゆる副業に従事し現金を得る。調査村では、そのひとつが女性による土器づくりである。



図1

ルオ社会における社会組織、結婚とジェンダー

ルオ社会は父系の分節的社会であり、一夫多妻（クラン外婚）を行う。一人の既婚男性を中心に、その妻たち、子どもたち、そして孫たち、と2-3世代からなる大家族が居住集団でありダラ (*dala*) とよばれ、その成員が暮らすコンパウンド（家囲い）そのものもダラという。このダラは長である既婚男性の名前に場所の前置詞 Ka をつけ、村落のなかでは Ka-〇〇とよばれる。村落はこうしたダラが多く集まり、リネージ集団となり、それは先祖を同じくするアニュオラ (*anyuola*) とよばれる親族集団が基本のリネージ村である。一夫多妻の場合、グラックマンのいう家財産複合がみられる。つまり各妻は夫によってそれぞれの家屋を建ててもらい、副業をもって自らの子どもを養い、家計の足しにする。

結婚は他のアフリカ諸社会と同様、婚資（ウシ）の支払いで成立する。伝統的には結婚の交渉には男性側が女性側のダラを訪ね、支払う牛の数を決め、分割払いをする。数頭支払ったのちに女性が嫁入りし、その後男子をもうけたあとに残りの支払いが徐々にされることになっていた。90年代には、婚資を支払うまえに同居をし始める同居先行型が珍しくなくなった。

男性は14歳頃に自分の小屋をもち、そこで結婚し、男子をもうけ子どもが2,3歳になればやがて父のコンパウンドから独立する。女性は16歳頃に仲介者をつうじ結婚、夫によって家屋を建ててもらい、男子を出産して一人前の大人の女性とされる。

ルオ社会における伝統的なジェンダー観、男女の社会的地位や権利には大きな差が存在する。ルオの慣習では女性は結婚し夫を通じてのみ、土地の使用権が得られる。娘には土地の使用、相続の権利はない。したがって女性は結婚しないと村で生きていくのが大変困難である [椎野 2008]。そして結婚後も夫の意見は妻や娘の行動や進路を大きく作用する。筆者が調査を開始した1990年代半ば、女性の教育事情はあまりよくなく、8年制の小学校を終える女子はクラスの半分に満たず、卒業までに婚出する人が多く、その先のセカンダリースクールに進学するのも、男女問わずクラスから数人しかいなかった。近年は子どもの教育を考える女性は増加してきており、女子の教育事情も少しずつ村落社会でもよくなってきている。

ルオ社会における土器

ルオの土器に関する研究は物質文化として、考古学、民族学からのものがいくつかあるが [Wanddiba n.d., Herbich 1981, Barbour and Wanddiba eds. 1989]、人びとの日常生活のなかにおける土器づくりの位置づけや製作や販売のプロセス、人びとの具体的な意気込み、人間関係等との関係に注目した人類学的研究はみあたらない。社会によっては、土器づくりは男の仕事とされているところや、儀礼的な土器のみは男性がつくる、といった慣習のあるところもある。

ケニア・ルオ社会では、土器は製作も所有も、女性特有のものである。土器のなかでも、とりわけ水瓶はどの家にも調度品として重要な妻の所有物である。飲み水は人間が欠かせない最も重要なものであり、それを貯蔵する水瓶は命の源であり、妻が管理する象徴的なアイテムである。ルオの家屋の中では、水瓶を置く場所が決まっており、水瓶のなかを週に一度洗うのは妻の役割であり、水瓶を動かすことができるのはその家屋の主である妻である。ホーローやアルミ、プラスチックが入ってくるまえは、食器も土器であったという。

ケニアでは、土器は19世紀ごろから経済的なアイテムとして重要になってきたといわれる [Wanddiba n.d.]。調理するものによって土器のつくりが異なり、数々の調理土器は妻の所有物の象徴でもあった。とりわけルオは土器作りで有名で、隣接民族のグシイ人やクリア人たちとのやりとりのなかで、重要な交換材のひとつだった。1920年代後半、フィンガーミレット満杯がその土器一個、という交換レートだったという。現在でも青空マーケットにおいてグシイ人はバナナ、豆、メイズを売りに来て、ルオ人の作った土器を買って帰る。

ジェンダー・セクシュアリティに関する土器づくりの禁忌

先述のように、ルオ社会における土器作りは、成人女性の仕事である。子どもたちは母親たちが製作する周りで粘土をいじり何か作って遊んだり、土器作りも真似したりしてみるが、土器の運搬を手伝う程度で、実際の経済活動には従事しない。未婚女性も土器づくりをしないほうがよいという。なぜなら、心がすべて土器づくりに集中してしまうので子どもができなくなるからであるという。マーケットで土器を売るのもよくないとされる——というように、ジェンダー、セクシュアリティ、死の穢れに関する禁忌、信念がいくつか存在する。

たとえばセクシュアリティについては、土器づくりは女性の仕事ではあるが、月のものがあるとき

は土器をつくってはならず、土器を焼成しているところにも、近づいてはならない。土器が割れてしまうからだという。同様に、焼成しているところに妊婦が近づくと嫌う人もいる。また出産のあと、血がまだとまらないうちは土にふれてはならず、8日経ったのちに触れてもよい、双子を産んだ場合は16日後になったら従事してよい、といわれる。また既婚の女性も、夫と性交をした次の日は焼成してはならない。土器が壊れてしまうからである。とりわけ赤色を使った水瓶 (*Dapi mar pala*) を作っているとき、その土器が完成するまで夫と性交をしてはならない。もし、完成するまでに性交してしまうと出来上がりの色がよくでないといわれる。汚れ (*chilo*) をもたらすからだという。

死に関する禁忌は、夫、母など近親が亡くなったときは剃髪 (*Liedo*) の儀礼がおわるまで、土を採りに行ってはならないので、その作業はほかの人に頼まねばならないという。村内の近隣の人が亡くなったときも、埋葬がおわるまで焼成をしてはならない。もし焼くと、土器が割れてしまうという。成形をするのはかまわない。

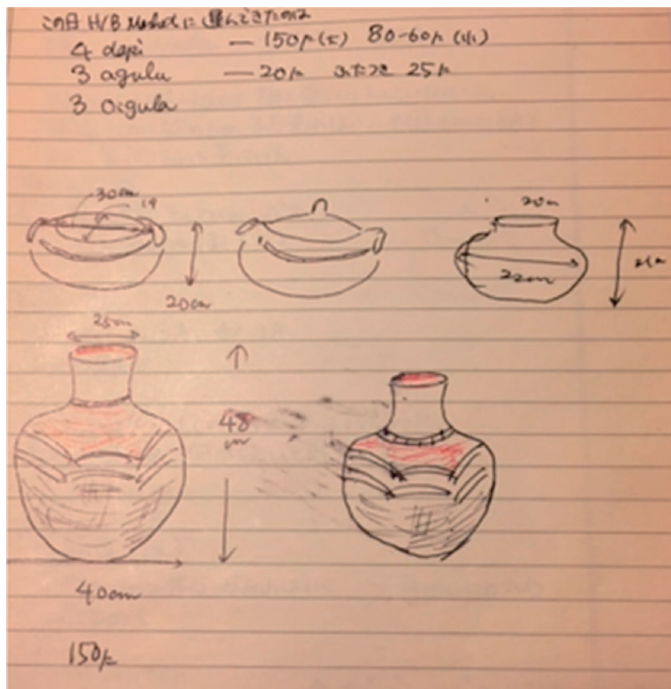


図2 土器の種類とその形状

上段の左から1, 2は魚用のオイグラ (*oigula*)、右端は肉や野菜を調理するアグラ (*agula*)、下段は水瓶 (*dapi*) (筆者のフィールドノートより)

土器の種類と作成の過程

ルオ人がつくる土器の種類には、概して魚用のオイグラ (*oigula*)、肉や野菜を調理するアグラ (*agula*)、水瓶 (*dapi*)、水瓶を変形させた蒸留酒を作るための土器がある。作製がやや困難な蓋つきにする場合もある。

土器をつくる過程は、大きく3つに分かれる。土づくり、土器の成形、そして焼成である。

表1 土器をつくる過程

- | |
|--|
| (1) 採土 → (2) 粘土の保存 (3日は寝かせる) → (3) 粘土づくり (3種類の異なった鉱物を含む土をまぜる)
(4) 土器の成形 (コイル式) → (5) 文様づくり
(6) 乾燥 (屋内で2、3日。半乾きになる) → (7) 底の整形 → (8) 乾燥 (陽の光に少々さらす)
(9) 窯づくり → (10) 焼成 |
|--|

ルオ人が土器づくりが得意であることは周辺民族のあいだでは有名であるが、実のところ、ルオランド内であっても粘土がとれない地域では当然ながら土器づくりはできない。土器づくりをする人のなかには、生家の地域ではその経験のない人もいる。また概して、土器づくりは成人女性の仕事であるので、その過程を自然に観察して知っていても、実用のもをつくるよう訓練される人は少ない。嫁入りしてから義母とともに作り出す人も多い。土器の形状、模様なども、製作者の個性や教わった人の作法が作品に反映される。青空マーケットでは、ある特定の製作者の土器をめあてに買いに来る人もいる。また明らかに、ベテランの作者と経験の浅い作者のものとは、耐久性と重さも異なる。ベテラン作者のものは軽く、強い。

土器の側面の模様は、それぞれの製作者の個性、またその教え子に引き継がれるが、どの種類の土器も、底から下部は縄文模様をつけることになっている。マニラ (*manila*) とよばれる現在はプラスチックの素材で編んである道具を使い、水で粘土をなめらかにしたところを指でおしながら走らせ、文様をつける。ほか指、爪、クガ (*kuga*: 植物の種の殻) 等をつかい丁寧に幾何学的な文様をつけていく。

土器の成形と乾燥の次、すなわち最後の段階は焼成のための窯作りである。収穫したトウモロコシの茎等を地面に並べ、それらにそって側面を地につけ土器をならべ、その口を斜め上にして葉、藁でこんもりと山をつく火をつけ、ときおり空気をいれる。一つ一つ、焼け具合の様子をみながら、できあがったものから棒にひっかけ、準備しておいた薬草でつくった液体を熱い土器にむかって、木の葉につけて振りかける。この液体は土器を黒光りに仕上げ、また耐久性をますという。



水瓶の成形



窯をつくる



焼成



仕上げの薬草の液体をかける

青空マーケットでの販売

土器は壊れやすいので、運搬には気を遣う。青空マーケットが開かれる際に販売にでかけるのだが、次週はどこに行くか製作者同士で相談し、その日にむけて準備をする。バナナの葉を土器の間にかませてしっかりと梱包する。製作者同士のやりとりで、売りにいかなくとも誰かの作品もともに梱包、運搬したり、バスステージまでの30分ほどの距離を頭上に乗せて運搬するなど、臨機応変に協力しあう。

Aさんはマーケットの開かれる広場までの交通費は20ケニア・シリング（1ケニアシリング=15円相当。以降、シルと記す。）（本人）、30シル（土器運搬代）、Bさんは20シル（本人）、40シル（土器運搬代）であった。また販売するには、地方政府（Homa Bay County Council）に販売する量によって税金を支払わねばならない。Aさんは10シル Bさんは20シル支払った。

表2 陶工の女性たちが青空マーケットの日に持ち込んだ土器内訳（2001年）

Aさんがマーケットに持ってきた土器	Bさんがマーケットに持ってきた土器
魚用（大）30シル：3個	魚用（大）30シル：3個
魚用（小）15-20シル：3個	魚用（小）25シル：8個
肉・野菜用（小）20シル：1個	野菜用（大）40シル：3個
水瓶（小）100シル：1個	野菜用（小）25シル：2個
	欠けている魚用：10シル

Bさんはこの日、持ってきた土器のうち小さい土器（魚用）をひとつ売りのこした。445シルの売り上げで、売り終わったあとにソーダを飲みに行った。販売の場にいた筆者にもソーダ代の20シルくれた。その後、彼女は自分の買い物としてタバコ2束、玉ねぎ、オメナ（干したカタクチイワシ）、ケロチン油を購入。Aさんはすべて売り、260シルの売り上げだった。帰りに、彼女はオメナ（20シル）、ケロチン油（20シル）購入した。帰路の交通費はそれぞれ15シルだった。

参考として、毎日の食事に使うトマトの値段は、農夫から買えばトマトが4つで3シルだった。マーケットでの売り手の値段は小さトマト、6つで5シル、であるので、トマト仲買・販売をする場合、1セット（6つ）売れば1シル分が売り手のものになる。背負うほど大きな籠で1籠売ると200シルくらいになる。



丁寧に、割れないよう梱包する



マーケットでの販売

土器の需要の変化

現在はスフリヤとよばれるアルミ鍋が流通しているが、かつて調理鍋はすべて土器だった。1965年代にスフリヤが出回りだし、主食のウガリ（トウモロコシの練り粥）用の土器の需要は低下していった。1980年代にはプラスチックが出回り始め、それまでは食器としての小さいボウルも作っていたが、需要が低下した。

一般に、若い女性は料理用の土器は割れやすいので使わない人も多いが、じわじわと火が通り料理が美味しくできる、と愛用者もいる。一方で現金経済の浸透と相まって、酒造りはケニアでは違法であるが、現金獲得の隠れたる手立としてチャンガー（蒸留酒）作り用の大きい土器を作るようになる人も多くでてきた。また従来のシンプルな土の色、仕上げ薬草の色の黒光りだけでなく、さまざまな原色でペイントを施した土器を屋内の装飾用として作製もされた。

互助組織から・「女性」? グループへ

村落のなかでも中心的な土器の作り手、Bさんが土器づくりをする女性たちの互助組織を1994年から開始した。政府には未登録で会計はなく、メンバーは15名で、互いに助け合ってマーケットに運搬することを主たる目的としていた。7-10個の土器を各人がグループのために寄付し、マーケットの日毎にどのメンバーの日であるかが決められており、その日のもうけはその人のものになるしくみだ。メンバーが15人なので、15人ごとに自分の番がまわってくる。もし売れ残った場合にはマーケット近くの友人宅におかせてもらい、次のマーケットで売る。70個の土器をたいてい売ることができ、魚用の柄つきの土器(oigura)が一個あたり25-30シルでよく売れたという(2001年1月)。

ところが、この女性互助組織は、男性たちの介入により破綻することになってしまった。筆者が土器づくりに関心をもって、女性たちと行動を常にとともにしだしたことが、大きな要因でもあることは否めない。積極的に活動していたある女性は、こう言った。

「先週の土曜、ほかの役員たちが私のところにきて、会計係をかえるからお金をだすように言われた。彼らはKachieng リネージだけでグループを作りたがっているようだった。役員はひとつの特定のアニューオラ(小リネージ集団)かダラ(拡大家族)から選出するのではなく、Jo-Kachieng, Jo-KaFulu, Jo-Karura.. からとさまざまなリネージから選ぶようにすべき。彼らは私たちが知らない間に毎晩、ミーティングをしているらしい。初めは女性グループとして発足したのに、ジョーンとエゼロンが加わった。すると運営が難しくなってしまう。彼らは、Wakana(筆者)が日本からお金をもってくると期待している。ミレゴ老人は以前も村の組合のためのサトウキビ畑を自分のものにしてしまった。エゼロンも口座のお金を勝手に引き出し「食べて」しまった。もし問い詰めようなら、喧嘩腰になる。

だから今後、もうひとつのクラン(氏族)の人たちもメンバーにいられて、広げて別のグループをつくる予定だ。いま収穫の時期(12月、1月)は畑仕事で忙しく土器作りは難しい。それが終わったら動き出すつもり。」

上記で言及されている、ジョーン、エゼロン、ミレゴ、といった男性はいずれも陶工の女性たちの夫である。女性たちがうまくやっているのをみて、また筆者自身が熱心に彼女たちから土器づくりを教わっているのを観察し、日本からいい援助を得よう、と夫たちで盛り上がってしまったのだった。

おわりに：調査開始から15年後

筆者が村に暮らしていたころから、15年のときが過ぎた。中心的に土器を製作していた女性たちもだいぶん年は取ったが、健在である。ただ、現在はほとんど活動がみられないという。

ほかのトマト売りなどの小さなビジネスに比べ、明らかに土器づくりには大変な手間がかかる。そして運搬中に破損するリスクもあり、先述のように販売価格も安価だった。女性のなかにはもちろん、得意でない人、そうした手間を嫌って携わらない女性もいた。だが長い時間と手間のかかる土器の製作の過程でみられるのは、いくらもうかるか、というだけでなく、村内の女性たちがともに集ま

り、さまざまな話をしながらそれぞれが自分の土器を製作し、互いの作品について評価したり手伝ったりしながら完成させ、それらがまた現金になるという喜びがあった。女性たちが集うことで、様々な情報が交換され、村内の男性を中心とするリネージ間のいさかいも、女性たちのネットワークのなかではさして深刻でなく、むしろ空気をおし穏便にことを運ぶ場合もあった。

近年の問題としては、ガソリンの価格の高騰のため、最寄りのバス停から、しばしば訪れていたマーケット場までの交通費は、大人一人当たり20シルから50シルに上昇。また、ルオランド全体として製作者が少なくなってきたため、料理用土器も30～50シルから200シル、水瓶は150シルから500シルまで値段があがっている。人びとの土器へのかかわりかたが変化してきたこともあるが、実際のところ、村内の人口増加、土地利用の増加で休閑地が少なくなってきたことから、焼成に使用してきた草がなくなってきたのである。2011年の訪問時にはまだやっていたが、次第に継続が難しくなってきた。

ヴィクトリア湖近くのある村では、この土器づくりの技術を社会資源として、海外の教会、NGOと連携をとりつけ、HIV エイズ等の孤児をかかえる祖母たちを支える互助組織をつくりだした。(http://grandmothercircles.org/kenya/project4/) 今後、この調査地の人びとが自らの土器づくりの技術、創意工夫とその熱意を、どのように人びと自身の社会的、文化的資源としていくかは、未知数である。

〈参考文献〉

- 椎野若菜 2008 『結婚と死をめぐる女の民族誌——寡婦が男を選ぶとき』世界思想社。
Barbour, Jane and Shimiyu Wanddiba eds. 1989 *Kenyan Pots and Potters*, Oxford Univ Press, Nairobi.
Herbich, Ingrid 1981 *Luo Pottery: Socio-Cultural Context and Archaeological Implications*, Institute of African Studies, University of Nairobi.
Wanddiba n.d. *Craft and Manufacturing industries*.